

【宿縁誕生の話】

今年の1月号で宿縁500号を迎えたことは感慨無量の感を覚えます。

これまで毎月続けて発行することができたのは読者の皆さんがあつてのこと、その内容は決して自慢できるものではありませんが、いつの間にか号を重ねてきたんだなあーと思うばかりです。

昭和44年に当時の数少ないご門徒の熱意とご協力で待望の本堂が建立されましたが、私も若くそれに応えるのは浄土真宗伝道の道だとの気概があつたように思います。その年の8月から毎月ご講師を呼んで21日に法座を開くことになりました。

1971年(昭和46年)2月に「宿縁」のタイトルで第1号を創刊したのは、昭和44年12月の法座に出講された「嘉戸大恵」という島根県江津市の布教使さんとの出会いがあつたからです。「如来のはたらき」と題して法話された老僧の身からにじみ出る念仏の味わいは今でも忘れられません。たった一度きりの法縁でしたが、その後毎月ご自坊で発行されている手書きの寺報「宿善」を師が亡くなられるまで送ってくださいました。確か1000号は越えていたと思います。

先ずできることは文書伝道と考えていた私には、この嘉戸先生の寺報「宿善(しゅくぜん)」が心を動かし、ロウ原紙に鉄筆で書くガリ版刷りに始まったことが懐かしく思い出されます。青焼きと呼ばれた湿式そして乾式の複写機へと変遷を経ながら今日、お蔭さまで500号に至りました。

(前任職 平野俊興)

○「宿縁」500号記念に寄せて

「宿縁」は本年1月号で何と記念すべき500号の発行となりますことに感動しております。

四十四年間に亘って発行し続けられていくことを思う時、これひとえに阿弥陀如来さまの誓願のおはたらきと、本願を抛り所として「自信教人信阿弥陀仏の本願の救いを自分も信じ、他人にも信を勧めること」の教えを心に持ち続けて門徒や多くの人を教化していられる前任職、住職の信仰の姿勢やご門徒さまの熱心なご聴聞の心が相応している賜物と思います。

宿縁とは言うまでもなく、阿弥陀仏が永劫の昔から衆生を救済しようとの誓願をおたてになった縁のことで、親鸞聖人は教行信証の総序に「たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」とのお言葉からの「宿縁」ですね。

今、本願他力の教えに遇えたのは、永劫の昔から私を仏さまにしたいとの一心によるおはたらきによるものであることに気づかせて戴いて、煩惱の心にいいようのない有難いご恩を思い、南無阿弥陀仏の称名とともに報恩の思いしきりです。

宿縁を毎月読ませて戴いて色々なことを教わり、学び、気づかされます。その中で大きな目的としては「生まれ難き人間に生まれてきたことの因縁と、何をなしに人間のために生まれてきたのか、それは人間が仏になるために生まれてきた。」という釈尊から親鸞聖人に伝わった阿弥陀仏の教えを伝えて、生死(迷い)を解決するために再々品をか

えて書き伝えられていることだと思えます。お願いがあるとすれば、毎月の宿縁の内容について常例法座の時に改めてご法話頂ければ内容が尚一層理解できると思いますが...

(門徒総代 錦織春海)

「宿縁」が今月号で500号になると、前任職から伺って、思わず計算してしまいました。一年一二月で500を割ると、四一年八ヶ月！絶句すると同時に、感嘆、賛嘆の念がわき起こりました。「すごいな!」。しかし毎月お送り頂くのを当然のように受け取り、また珠玉のエッセイを読み流してきた自分を省みて、慚愧に堪えません。

この「宿縁」という言葉は、前任さんから『教行信証』総序第二段にあります、「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」から採ったと教えて頂きました。ある現代語訳では「遠く過去からの因縁をよるこべ」とあります。私流に言いますと、「不可思議の本願力にからめとられたことをありがたくよるこべでございます」ということになりました。

連綿とした阿弥陀さまのお働き、その具現した姿としての「宿縁」を享受できる身の幸せは何ものにも喩えようがありません。この上は、前任さんにはご自愛頂き、また文字通り法の相続として住職がいつの日か引き継がれ、600号、700号(この頃はお浄土で拝見します)と続くことを願ってやみません。

(門信徒会会長 河合功)

宿縁500号おめでとうございませう。

宿縁の出合いは1996年7月の279号「合掌」からで、当時は必ずルビがふつてあり作業も大変だったのでは、題材も多種多様ながら一貫して説いてくださるのは、聖人のみ教えに出会った私達を、この道から外れないよう念仏者として歩いて行けるようにと。聴聞も我一人のため。宿縁も我一人のため。寺灯雑記は、お寺の行事が手に取るようにわかります。

(仏教婦人会会長 前田奈美恵)

宿縁創刊500号を記念して一言お祝いを申し上げます。

確か、昭和47年6月から宿縁が毎月発行されるようになったと記憶しております。その当時自分も24歳頃だったと思いますので、宿縁が毎月届いておりましたが、全部を読み終えた記憶がありませんでした。

こんなに長期間、続けるということだけでも前任職は大変ご苦労をされたと思います。内容についても多種多様で、最近はず2回は読むようにしております。今後、楽しく読ませて頂きたいと思っておりますので、1号でも多く発刊して頂きたいと願っています。

(仏教壮年会会長 石井保)

